自然

「天声人語」十八年の歳時記

荒垣秀雄

「天声人語」十八年の歳時記

自然

荒垣秀雄

荒垣秀雄（あらがき・ひでお）

明治36年（1903）岐阜県に生れる。早稲田大学政経学部卒業。大正15年朝日新聞入社。英帝ジョージ6世戴冠式特派員，社会部長，リオデジャネイロ支局長，マニラ総局長。戦後，論説委員となり「天声人語」執筆。その執筆に対し第4回菊池寛賞，日本鳥類保護連盟から同欅の愛鳥運動推進に対し感謝状，ブラジル国サンパウロ大学からサンフランシスコ・アカデミー名誉大勲章などを贈られる。

自然——「天声人語」十八年の歳時記
定　価　720円
発　行　昭和39年1月10日　第1刷
　　昭和47年2月10日新装版第1刷
著　者　荒垣秀雄
発行者　角田秀雄
印刷所　図書印刷
発行所　東京 北九州 大阪 名古屋　朝日新聞社
0095－253985－0042

自然――「天声人語」十八年の歳時記／目次

昭和二十一年……一
季節感の回復　蚊と蠅と進駐軍　国土に愛情ある政治　朝顔の蕾を数える
コスモスの花　松の枯死とウガンダ蜂　卒都婆と鉢の木
昭和二十二年……九
食用の菊　ノアの洪水起らん　台風　名月を煙で曇らせ　自然は素顔で
門松と蒙古沙漠
昭和二十三年……一六
お天気の挨拶　春風抄　人を眺める桜の感慨　初冬の美
昭和二十四年……二一
菊と心　桜か竹か　冬の花、春の花　野鳥の庭先訪問　燕の政治批評
不忍池の埋立
昭和二十五年……二九
桜と花水木　日米・花の交歓　山火事　蠅・蚊・回虫の楽園　蜜蜂は花を汚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さず　アルプスの花　新渡戸稲造と治水　左千夫の蟋蟀と水害　外苑の松と
仁徳陵　名月と戦争　菊見に集う　餅

昭和二十六年……四五
元日の梅・冬の竹　蜜柑と林檎　立春のころ　緑の週間　手鏡　他家の花
麦秋　雨季と人間　台風を飼い馴らせ　ホリを埋めるな　百年後の並木蔭
菊の蔭の刀　紅葉と愛国心　初冬の風物とマスク

昭和二十七年……六四
無事息災の縁の下　十勝沖地震　旧日本の彼岸供養　花見酒　こどもの日
鮎と鵜飼　蠅の追放解除　秋の身支度　秋深し　風雅の社会化　寒さのさ
まざま　除夜の鐘を聴く心

昭和二十八年……八一
古きもの・新しきもの　ボロ雛の歴史　ヒバリの巣　ヒバリの手紙　彼岸の
春雪　犬と猫と猿　木々の言葉　春泥　鯉のぼりと児童憲章　愛鳥条約
窓と風　青蛙誕生　鳥の鳴声　秋の人声　明治のお月様　名月へ宇宙旅行
浅秋の風物　虫干と校倉　師走のシワ寄せ　門松

昭和二十九年……二三
暖冬の雪　人工の春　花の標札　郷愁　新緑と坪刈り　こうもりとカラカサ　野の鳥と空気銃　ツバメの悲歌　カイガラ虫の天敵　無季の花　天候異変　墓地の文化　喪章をつけた太陽　花の色は　花のある手紙　夏姿よくぞ女に　国立公園とは　花と虚子と岡田啓介　良夜の感傷　百舌鳥・百日紅　野鳥の巣箱　紅葉　花咲かす根気　地球の温暖化　日めくりを愛す
除夜

昭和三十年……一五六
春待つ冬枯　彼岸と巣箱　花の手紙、鳥の手紙　空気は信用を失った　ふるさとの木　裏見の花　広重の雨、語る石　魚の思春期　野鳥を誘う木
お天気の歌　花後のいたわり　手作りの野菜　夏の夜の虫　喜雨　蟬
日本の水はうまい　秋彼岸の動植物　秋の花鳥　晩秋から初冬へ

昭和三十一年……一八七
車内の暖房　雪どけ　春立つ日　鶯だより　鳥だより　春の粧い　草木
愛と人間嫌い　愛鳥の父オージュボン　コイノボリは鳥なの？　初夏の風物

燕の食べる虫の数　郭公の鳴き声　仮死の天才　夏の花花　豊作と一石めし
破れ芭蕉　秋彼岸の虫の音　花の誘惑　虫どもは冬眠支度　魔法の紅葉

昭和三十二年……三〇

雪国の詩　立春と月の暦　冬山をなめるな　ストロンチウム90の悲歌　春めく　雛あらば娘あらば　鳥の来る楽しみ　彼岸の詩　鳥類五十倍化運動
新緑さまざま　花の休暇　鳥一家　なぜ街路樹を剪るか　探鳥会　街路樹は語る　忍び入るセシウム　死の灰の谷間　仲秋の名月と台風　歩く散歩道
をつくれ　柿・菊・霜　秋のような師走　林檎と蜜柑

昭和三十三年……三六〇

宇宙世紀第二年　ひな祭の源流　日向を恋う　放射能雨の悲歌　メタセコイア・青桐・杉　川の素顔　こどもの日に　鳥と人生　死の川と鮎　公園をつぶすな　井戸の眼　蟬の一生　登山は登って下るもの　広島原爆十三年
白い花　秋の虫・秋の草　秋の渡り鳥　雨ニモ負ケル・風ニモ負ケルひっそり
咲く花　花は孤ならず

昭和三十四年……二九六
春立つ日　蕗・芹・梅　雪は〝水の貯金箱〟　自然美と観光　春色さまざま
新緑と野球場　梅雨どきの風物　伊勢湾台風の大惨害
昭和三十五年……三一
種子の風船旅行　街路樹と火伏せの木　さみだれ傘　盗まれぬ並木のリンゴ
自然美の保護
昭和三十六年……三〇
平凡で佳き正月　滅びゆくトキ、雷鳥　春彼岸の花と鳥　実のなる木を植えよう　五月の自然　空港の鳥　梅雨の風情　豪雨禍とダムの功罪　洪水をなだめた清正、信玄　立秋の感触　二百二十日以後　第二室戸台風　沈下都市に高潮
昭和三十七年……三四
立春正月　新緑の息吹　大樹は切るべからず　七月の自然　三宅島の大爆発
夏型の秋　秋の風物　冬晴れの恵み　寒冬の周期説　越冬ツバメ　スモッ

グ禍　スモッグから青空をとりもどせ　木の実は旅人と鳥にも

昭和三十八年……三六八

白魔　放射能の雪　豪雪と異常乾燥　鳥獣の生きる道　新版「生々流転」

黒潮異変と異常低気圧　杉並木、松並木　春秋不在説　桜の国立公園　鮎と

うなぎ　五月の詩　桜観の修正

あとがき……三八九

季節感の回復

——五月一二日——

政局は不明朗だが、日本の新緑や花の美しいのに、今更ながら目をみはるのである。つやつやしい柿若葉や欅、栗など木々の新芽、スクスクと伸びている麦の青さ、それに山吹やつつじなど、初夏の山河は美しい。目に青葉の句もおのずと口にのぼる。初がつおの方はまだ実感に至らぬが。

花や緑も何年ぶりかに接する心地がする。平和になって季節感をとりもどしたのである。五月といえば、去年の今頃はB29の絨毯爆撃がいよいよ烈しく、家を焼かれ、肉親と離れ、花や緑を賞するどころではなかった。

本土決戦で敵を殲滅するとか、一億玉砕で国体を護持するとか、あのまま続けていたら、コロネット作戦、オリンピック作戦をまたずとも、原子爆弾で国も山河も亡びつくしたに相違ない。

幸いにして山河は残り、花も緑も季節を忘れることなく、焦土を美しく彩ってくれる。だが、国破れて山河在り、などと呑気なことをいっておられない。迫りくる大量飢餓に、今にして強い政治の手を打たねば、木の芽、草の根をむさぼり尽して、美わしの山河も、丸坊主になってしまうだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

蚊と蠅と進駐軍

——七月一五日——

どこもかしこも菜園なので、今年ははえや、やぶかがひどかろうとかくごしていた。とぼしい食卓の上などは、はえで黒くなるのではないかとおそれていた。ところがこの頃はえにはトンとお目にかからなくなって、さては先日の低空飛行がDDTをまいたのかと、科学的駆除法のききめに今さらおどろくのである。

俳句ではかやはえは季題にさえなって、家族の仲間くらいのつもりで、きってもきれぬ人生の一部と心得られ、根本的駆除などは思いもよらず、一匹一殺のかまえがせいぜいであった。ところが進駐軍宿舎の附近では、余恵で蚊帳のいらぬ夏をすごしている。ただし花粉をはこぶ昆虫も一緒に姿をけしたので、南瓜の花の授粉は、人間の役割ときまったようだ。

『ドブをさらえよ、水たまりをつくるな、ねずみを駆除せよ』と隣組のふれがくる。その附記に『進駐軍がしらべにきます、おこたると罰せられます』と必ずあるのがなさけない。このつけたりがないと、動かぬ、ということになると、ことは小さくない。

外国人の監視がなければ、生活の衛生化も行わない、というのでは、すでに国民として独立の精神をうしなっている。ドブさらえにかぎらず、自主的にするか、占領軍の監視のゆえにするか

で、心の品位に天地の差がある。

国土に愛情ある政治

——八月一三日——

この秋は豊作うたがいなしというので、民心にも何となく明るさが射しこんでいる。だが秋落の心配に加えて、台風による洪水が各地に起ったならば、食糧に対する明るい希望も吹ッ飛んでしまう。水を治めんとすればまず山を治むべし、と昔からいわれている。ところが戦争このかた、山を治めるどころか、山は丸裸にされている。戦争中の濫伐の受取証文として、昨年は水害で大減収をみたが、終戦後も戦災復興と木材の値上りで濫伐に輪をかけ、去年よりも更に恐るべき状態である。

国破れて山河在りというが、これでは山河も破れ去っている。雨がなければすぐ水が涸れて水力電気も乏しくなり、自然製塩も電熱器も禁止するという。台風がくれば丹精の田畑も流されるのを如何とも為し得ず、自然の暴威のままに国民は飢餓にさらされる。原子爆弾で台風の進路を変えることよりも、先ず足もとから山を治める政治が肝要であろう。草を植えて花を得るには一年を要しない。人を植えて人材を得るには十年、二十年を要する。木を植えて山を治め水を治めるには、百年の歳月を要する。一年やそこいらで異動する今の地方長官は、国土に対する愛情あ

る政治において、封建の藩主にもはるかに劣るのではないか。

朝顔の蕾を数える

——八月二六日——

朝顔は清潔可憐な花である。その朝顔がこの夏、都鄙をとわずどこの庭先にも見られなかった。この花が姿を消したのは、食糧事情が窮迫し家庭菜園がはやりだしてからである。朝顔のみならず、草花という草花が、われわれの庭から追放されてしまった。

日本人が花を愛さなくなったからではない。花を愛する余裕が物心両面ともになくなったのである。咲く花は、食える実の生る花ばかりである。南瓜、茄子、胡瓜は、空地という空地に花盛りだった。生きるか死ぬかのせっぱつまった心境で、咲かせた花である。

しかし南瓜の花も案外いい香をもっているのを発見した。紫紺の茄子、琅玕のようなさやえんどうの美しさにも気づいた。武者小路実篤氏は好んで芋の絵を描くが、自分で作ってみると、じゃが芋や南瓜のたたずまいにも、驚嘆に値いする美を見出すのである。

花よりも実をとる功利主義の美感覚だとのみは言ってしまえない。日本人の美感覚が菜園造りで幅をもってきたことは確かだ。だがやはり明日の朝ひらく朝顔の蕾を数える気持はほしい。来年の夏はそういう食糧事情にもってゆきたい。

米国では、冷蔵飛行機で、西部の花を東部の市場にもってゆく計画をしている。梅や蘭や菊を、冷蔵輸送機で太平洋を一またぎに輸出する時がないとはいえない。

コスモスの花

――一〇月二七日――

コスモスの花は、宇宙という大きな名をせおっているが、可憐な草花である。この秋はどこの家の庭にもこの花が美しく咲きみだれている。一、二年前までは、庭に花を咲かす余裕は物心ともになかったが、家庭菜園の一角を花に割くだけのゆとりがでてきたわけである。山草をあさり、かぼちゃのつるまで食った終戦前後にくらべれば、台所が苦しい苦しいといっても良くなったものである。

しかし今年は前年の豊作の声にだまされて油断した人が多かった。去年はかぼちゃを何十もとったという人が、今年はダリヤを植えコスモスの種をまく人が多かったのは事実だ。ところが豊作飢餓に不意うちをくった形だった。今年はまた欧州の穀物、カナダの小麦、米国のトウモロコシの減収で、世界的食糧危機が予想されている。欧州復興会議の報告では欧州だけで三千万トンの食糧不足だといわれ、ドレーパー米陸軍次官の談によれば、明年の春夏における米国の対日食糧輸出は割当減少はまぬかれぬと言い、また外電は、明春までに日本に対する輸出食糧は月額二

十五万トンから十万トンに大幅削減されるだろうと報じている。

新米価も消費者にとって四割以上高くなり、国内のインフレと世界の食糧分布図とをにらみ合わせて、来年は花を引ッこぬいて食い気一方の庭になるのではないか。わが家の一坪の庭の設計にも、世界の波がヒタヒタと寄せてくるのである。

松の枯死とウガンダ蜂

――一一月一八日――

松の木はもっとも日本的な美しさをもった植物である。黒松は雄々しく頼もしいし、赤松はこまやかな情趣をもつ。老松は古典的な美を構成しているし、若松、小松は優しく美しい。「松の木の日本」といってもよい。

その松がこの頃各地で枯れはじめた。宮崎、熊本、長崎、佐賀、岡山、兵庫の六県だけで、昭和十七年に四百三十九万本の松が虫害で枯れたという。それが東日本に移って、東海道の松並木や鎌倉の松林などドンドン枯れはじめた。

松を枯死させる害虫は、天牛科、象鼻虫科、甲虫類のものだという。伐りたおして焼いたり、松丸太に虫を誘致したりしているが、あまり効目がないらしい。

ブラジルのコーヒーが虫害で全滅しそうになったことがある。これを救ったのは、アフリカの

ウガンダ蜂だった。この蜂は出入できるがコーヒー虫は出入できぬ金網の中でウガンダ蜂を飼育した。コーヒー虫が繁殖すればするほど、蜂にとっては食糧がふえるので、蜂は急増してたちまち征服し、虫が減れば蜂も自然に低減した。この生物界の自然法でコーヒーの危機を救ったカンピナス東山農場の山本喜誉司技師はブラジルの恩人とされた。松にも何か救済法がありそうなものだ。食糧難からつぐみなどの小鳥をむやみにカスミ網で捕えつくしたのが、害虫の繁殖を促したのかも知れない。

法隆寺の七堂伽藍から松がなくなったら、京都の東山から、日本の山々から、松が消え去ったら、いかに殺風景な日本の風景になるであろうか。

卒都婆と鉢の木

——一一月二三日——

米がよくなったと思ったら、今度は薪炭キキンである。台所にとっては、前門のオオカミが去って、後門にトラを迎えた感である。家庭の主婦のなやみが、こうつづいては、婦人の解放も何もあったものではない。東京では、正月用に炭一俵という前ぶれだが、それも確実にもらってからでなければ御礼も言いかねる。どこの都市でも同様であろう。

この冬は、例年より寒いと予報される。ことにタケノコ生活者や、家無し者には、寒さもひと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.